文学の学習指導における資質・能力の開発的研究
－　演劇的な活動を中心に　－

学籍番号　　199302
氏　　名　井上陽太
主指導教員　土山和久

１．問題設定

先行きの見えない変化の激しい時流の中で、その変化自体をより良い方向に向かわせる力、すなわち資質・能力の育成が求められるようになった。本研究は、物語教材を「読むこと」の学習指導において、児童の資質・能力の育成を目指し、とりわけ“演じること”がその育成にどう寄与するかを実践的に考究するものである。筆者は、ある劇団の演劇ワークショップへ参加した際、そこでの活動や経験を通し、演じるその瞬間だけではなく、演じるために準備する時間、演じたものを振り返る時間を含めた一連の演劇的な活動が、「読むこと」における学習者の学びに関わる可能性を秘めていると考えた。もちろん、このような可能性を持つ演劇的解釈活動の効用は従来から語られてきた。しかしその有効性が十分に発揮されているとは言い難く、その活動自体が拓く資質・能力についての言及もなされていなかった。本稿では、このような現状を踏まえ、演劇的な活動がどのような資質・能力を拓くのか、そしてそれは如何に物語教材を「読むこと」へも可能性を放射しているのか実践的に考究していくことを目的とする。

２．先行研究に見られる演劇的解釈活動の実態把握

本章では、先行研究に見られる演劇的解釈活動を用いた授業実践を行い、その実態把握に努めることを目標とする。実際には Roleplay と呼ばれる演劇的解釈活動を用いて『注文の多い料理店』の単元において、登場人物理解の深化をねらう実践を行った。成果として一部ではねらい通りの結果が得られたものの、多くは想定に遠く及ばないという結果となった。その原因として考えられるのは、学習者が演じることに慣れていないという問題、そして演じることを方法としてのみ捉えることの限界である。

３．物語教材を「読むこと」における
演劇的な活動を用いた授業開発の基本構想

前章における実践の省察を踏まえ、本章ではイギリスとドイツの演劇的な題材を扱うプログラムに学びながら、日本の国語教育で物語教材を「読むこと」において演劇的な活動の有効性を十分に発揮するための学習指導を構想していく。

まずは方法としてのみ扱う活動を越えるために、イギリスで実践されるドラマ教育を参考に演劇的な活動そのものの特性や本来のねらいを明らかにし、そこから物語教材への援用可能性及び演じることが拓きうる資質・能力に言及する。結果、戯曲作品に無理なく出会うために用いられる演劇的な活動は、作品の構成要素に出会うための活動であるという点に物語を「読む

こと」への援用可能性が見出された。また演じるための力でありながら日常生活でも求められる力を育む点に資質・能力育成の足掛かりが見られた。

次に学習者の慣れの問題を解消することを目指し、ドイツのクリエイティブライティングプログラム（CW）の分析・考察を行なった。その結果、演じることの特性の中でも特に“対話性”への慣れを促しうると考えられた。

以上の分析を踏まえ発展課題実習Ⅰでは慣れの問題解消を目指すCWの実践を行い、発展課題実習Ⅱでは演劇的な活動の有効性が十分に発揮されること目指す実践を行う。

４．クリエイティブライティングを用いた足場作り活動の実践

本章では、CWを用いて慣れの問題解消を目指した授業実践について報告し、その成果と課題を述べる。実践で行なったCWは人物像の想像される名前を考え、その人物同士の対話を創作するという活動である。成果としては、ねらい通り“対話性”への慣れ、及び演じることへの意欲が観取された。逆に課題となったのはこの活動や演じることの必然性を提示できなかったことである。

５．演劇的な活動を用いた文学の学習指導の実践

本章では、3章の分析・考察をもとに演劇的な活動の有効性十分に発揮されることを目指した授業実践について報告し、その成果と課題を述べる。実践では、Sculpt と FreezeFrames と呼ばれる演劇的な活動を用いて『おにたのぼうし』の単元において、作品最大の謎に迫るための学習指導を試みた。成果としては、評価的な読みの構築、物語世界への没入、社会的価値の発見、に関しての有効性が見られた。しかし4章同様演じることの必然性を提示できなかったことは依然として課題となっている。

６．研究成果

本章では、5章において明らかとなった、演劇的な活動による成果を、「読むこと」の資質・能力及び文学に関わる資質・能力の育成という観点から捉え直していく。前者の観点に関して、Rosebrockの「読みの多層モデル」を参考としたところ、演劇的な活動による成果は［理解プロセスレベル］［主体レベル］［社会的レベル］という3次元全ての階層において資質・能力を拓いていたと結論付けることができた。後者に関しては、Spinnerの「文学的リテラシー」をその物差しとすることで、計6つの文学に関わる資質・能力を見出すことができた。

７．課題と今後の展望

実践研究を振り返り、本稿における反省及びなお残される課題として挙げられるのは、演劇的な活動を局所的に用いることの限界である。演じることが目的として成立していない日本の現状がその原因の根底にはある。しかし、その中でも演劇的な活動を十分に発揮させるためには、演劇的な活動とそれを用いるテクストの両側面において、妥当性を追い求めながら、“演じること”の方法的習熟を目指して継続的に実践を行う必要があった。今後はこの点についても考究し、実践を続けていきたい。